

2022年4月2日（於：しんらん交流館）

2022年全戦没者追弔法会「戦争を起こすのは人間です」シンポジウム

沖縄摩文仁の丘の慰霊塔・碑文が語りかける戦争の記憶

福島栄寿

一、はじめに

沖縄本島や離島に建てられた沖縄戦関係の慰霊塔・慰霊碑は多い（四四〇基）。今回は、都道府県によって建立された慰霊碑、慰霊塔、碑文を取り上げる。碑文には、慰霊塔・慰霊碑の建立の経緯、込めた願いなどが刻まれているが、実はその多くは、一九五〇・六〇年代に建てられたままのものが多く、その時代の意識が、如実に刻印されている。果たして、碑文には何が書かれているのだろうか。そして、碑文の言葉は私たちに何を語りかけてくるのか。

二、沖縄戦

沖縄戦とは、アジア・太平洋戦争末期に沖縄を戦場として行われた日米両軍の戦闘である。本土決戦に備えた時間稼ぎのための「捨て石」となった沖縄であった。一九四五年三月二三日、米軍の空襲に始まり、二六日に米軍は慶良間諸島へ上陸、四月一日には沖縄本島に上陸した。第三二軍司令部は戦闘を長引かせるために南部撤退を行い、「軍民混在」の戦場となり多くの犠牲者が出た。日本軍の軍人軍属約九万四千人（うち沖縄出身者二万八千人）がなくなった。沖縄県民の死者は政府の数字では約九万四千人と推定されているが、漏れている人を含めると、軍人軍属を含めて約一五万人の沖縄県民が亡くなったと推定されている（『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館）

三、沖縄戦関連の戦没者への追悼慰霊塔・慰霊碑・碑文

終戦後最初に建立されたのは、魂魄の塔（一九四六年）。米須地区に、三万五千余名の遺骨を収集し建立。一九七九年に国立戦没者墓苑へ遺骨は移された。また、一九九五年六月に太平洋戦争・沖縄戦終結五〇周年に大田昌秀知事の時に建立されたのが、平和の礎。国籍や軍人、非軍人の区別なく、沖縄戦戦没者二四一五二五名〔平成三〇年六月現在〕の名前を刻む。平和の礎については、金井創（沖縄キリスト教学院平和総合研究所コーディネーター）の次の言葉が示唆的である。「20万人を超えるというただの統計的な数字ではなく、一人ひとりに名前があり、人生があり、家族があったことを知るため、そしてかくも多くの人の命が失われていった戦争の愚かさを学ぶための学習教材です。学習教材とはこれが建設された当時の知事・大田昌秀氏から直接聞いた言葉です。つまり平和の礎とは墓でもなく、慰霊碑でも追悼碑でもない記念碑なのだ。それは戦争の愚かさ、痛ましさを学ぶ教材、学習教材だということです。」（「慰霊から平和構築へ」『知っていますか？ 沖縄県に建つあなたの都道府県の慰霊塔・慰霊碑を』所収）。

大田昌秀は、慰霊塔を五種類に分類している（大田：2007）。

- ①都道府県の慰霊の塔。
- ②守備軍将兵・無名兵士と住民を祀る慰霊の塔。例：黎明の塔、韓国人慰霊塔、痛恨之碑（久米島）、南洋群島沖縄県人戦没者並開拓殉難者慰霊碑、平和之塔（座間味島）、白玉之塔（渡嘉敷島）、集団自決之碑（渡嘉敷島）、他。

③職域・諸団体の慰霊の塔。 例：南北之塔、チビチリガマから世界へ平和の祈りを碑、他。

④男女学徒隊を祀る慰霊の塔。 例：ひめゆりの塔（ひめゆり学徒隊（沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校）、ずいせんの塔（沖縄県立首里高等女学校）、白梅之塔（沖縄県第二高等女学校）、他。

⑤沖縄県内市町村の慰霊の塔。例：招魂之塔（嘉手納市）、他。

それぞれの慰霊塔、慰霊碑には、ほぼ必ず碑文が併置される。碑文には、それぞれの塔や碑が建てられた経緯、理由、建立主体、建立主体の碑に込めた願いや思いが刻まれている。

例：「黎明の塔」(1)所在地 糸満市字摩文仁 (2)建立年月日 昭和27年6月 (3)合祀者数2柱 (4)設置管理者 沖縄県遺族連合会

碑文「第三十二軍は沖縄県民の献身的協力を受け力斗奮戦三ヶ月に及んだがその甲斐も空しく将兵悉く祖国に殉じ軍司令官牛嶋満大將並びに参謀長長勇中将等此の地において自刃す 時に昭和二十年六月二十三日午前四時三十分茲に南方同胞援護會の助成を得て碑を建て永くその偉烈を伝う 昭和三十七年十月」

参考(1)「牛島司令官は、一九四五年六月一九日、「爾今各部隊は各局地における生存者中の上級者之を指揮し最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」と最後の軍命令を下達し、二三日、長勇参謀長とともに摩文仁が丘の司令部壕内で自決した。」(大田昌秀：2007年)

参考(2)「黎明之塔の塔名を揮毫の造形物は、日本刀の切っ先に似る。しかも切っ先は天ではなく地を向き、一瞬にして突き刺すかのような切迫感を見る者に与える。大地は、母にたとえられる。母は命を産み、育てる。沖縄の命を、黎明之塔の切っ先がまたも脅かす。黎明すなわち「新しい時代の始まり」に逆行する。この塔の図柄は左手の握り拳を腹に当てており、切腹の姿を想起させる。武士道精神と軍国主義の再興を望む「黎明」が真意なのか。」(真鍋：2016)

参考(3)「秋待たで枯れ行く島の青草は 皇国（みくに）の春に甦へらなむ」 この牛島司令官の時世の句には、本土決戦を信じて疑わなかった胸中がよく表れている、と牛島さんは指摘する。沖縄戦の本質は「沖縄を守るため」ではなく、「本土決戦のための時間稼ぎ」だった。だからこそ、牛島司令官は司令部を置いた首里城での決戦を避け、沖縄本島南部に撤退し、最後の一兵まで闘うことを強要した—これが牛島さんの導いた結論だ。」(牛島貞満氏述 『A E R A』1996年6月27日)

四、碑文を読むために

都道府県の碑文について、『糸満市史』上巻（糸満市史編集委員会）には、次の指摘がある。

「総じて戦争（戦死）を肯定し、賛美し、平和への願望、戦争への悔悟、反戦の決意、沖縄との連帯に触れたのは少ないと指摘せざるを得ない。……また、遺族や関係者の心情として、戦没者への慰霊と哀悼の気持ちが強くなることは否めない。しかしながら、その死は「祖国の安泰と繁栄のため」と賛美し、「偉勲」「遺烈」「忠勇」として賛美する言葉が続く。」と。

以下、真鍋（2016）と平良（1983）を手がかりに、各都道府県の碑文の内容を見つめるキーワードとその意味を考える。

①美化・肯定（戦争・戦死の肯定、美化の響きをもつもの）

真鍋は、碑文にみる戦死の美化・肯定という点について、次のように指摘する。

「戦争目的の正当化は必然的に戦死の自県出身兵を英雄にまつり上げ、賛美する。「玉砕」「護国の楯」「散華」「英魂」「国に殉じ」…しかし戦場の兵士たちは、そのような美しく威厳のある死では決してなか

った。…出征時に故郷の村や町で「万歳！」の歓喜に包まれ戦地へ赴いた兵士たちの、末路はとてもみじめだった。その死に美辞麗句を添えても、死者は喜ばない。美化すると、死んだ命が軽くなる。」(真鍋：2016)

②平和祈念（平和への願望・祈念を表すもの）③懺悔・哀しみ（戦争への懺悔、哀しみを表すもの）④反戦（反戦の決意・誓いをあらわすもの）

平良は、碑文の特徴として、「すべての碑文におしなべて言えることは、戦争罪責の告白が見られないことである。」と指摘。「自分はそれ（戦争—引用者）に駆り立てられた被害者であると同時に、積極的に参加した加害者であったと自己告発し、それを悔いる言葉が全くみられないのである。(中略)「平和」云々という表現は幾つかの碑文にはあることはある。しかしそれらは自分の被災の痛みから出ているに過ぎないのであって、それ以上のものがあるようには感じられない。」(平良：1983)と厳しい。

⑤沖縄友好（沖縄との友好、連帯等を表すもの）⑥沖縄哀悼（沖縄への悼みを表すもの）

真鍋は、本土の「沖縄無視」という表現を用いて、「沖縄戦における沖縄住民の死亡総数は日本軍将兵をはるかに上回った。その沖縄に言及の都道府県慰霊塔は、わずか三基にとどまる。「多くの沖縄住民も運命を共にされたことは誠に哀惜に絶へない」(京都)、「沖縄県民の尊い人命を奪い」(滋賀・平成三年)、「沖縄の人たちとともに」(岡山・昭和四〇年)がすべてになる。／他の四三都道府県は、沖縄の犠牲と惨状にまったく目を向けていない。」と指摘する。

⑦沖縄楯・外地（沖縄を本土の楯、又は外地としてとらえたもの）

「本土」復帰前という時代状況のなか、各都道府県は沖縄に慰霊塔を建てた。そのためか、「福島の塔では、自県出身者の死地を「海外において」と書き…碑文に沖縄への言及のない都道府県の、沖縄無視が今も続く。」と。また、沖縄を「祖国防衛の御楯」(大阪府)、「本土防衛最後の戦場」(岩手県)と、「本土」を守る楯と見なす表現は、沖縄が「捨て石」であったことを想起させる(真鍋：2016)。

五 都道府県の碑文を読む

以下、県の碑文の幾つかを例に取上げる。

①神奈川の塔 神奈川の塔は、三名の知事がそれぞれ碑文を寄せている。昭和四〇年に建てられた碑文には、「われわれ神奈川県民は大東亜戦争終戦ここに二〇年を迎えるにあたり、南方諸地域において祖国の興隆を信じて参戦し、惜しくも異郷に散華せられた、み霊のご冥福を祈るため、ここ摩文仁の丘にふるさとの銘石を運びつきぬ平和への願いをこめて「神奈川の塔」を建立しました。」(昭和四〇年十一月二六日)と、「大東亜戦争」という文言が見られる。

次に平成二年建立の碑文には、

「先の大戦において、沖縄をはじめ南方諸地域で戦没された四万余諸霊のご冥福を心から祈ります。…ふたたび戦争がくり返されることのないよう八〇〇万県民とともに永遠の平和への誓いを新たにします。」(平成二年十一月二六日)とある。「大東亜戦争」は「先の大戦」に書き換えられ、「永遠の平和への誓い」を込める。三つめは、平成二六年建立の碑文。

「戦争の悲惨さと平和の尊さを、未来を担う次の世代へしっかりと継承します。戦没者の皆様の永久の安らぎを心よりお祈りします。」(平成二六年十一月二六日)と、戦死者を「霊」と表現せず、「戦没者」と表現し、「戦争の悲惨さ」という文字を刻む。

②**京都の塔** 京都の塔には、「多くの沖縄住民も運命を共にされたことは誠に哀惜に絶へない。」と、戦死した沖縄県民への哀悼の文言が刻まれている。

③**近江の塔** まずは、昭和三九年の建立当時の碑文。

「言語に絶する悲壮な沖縄の戦いに祖国のため尊い一命を捧げられた本県出身壱千六百七十三柱の御英霊をお慰めせんとする議県内に澎湃として起り昭和三十九年二月二十四日慰霊顕彰会を結成し県民の浄財を基として郷土の香り高き清石をもって緑り深い此の地に近江の塔を建立して御霊を合祀する」

次に、平成三年に書き換えられた碑文。

「言語に絶する苛烈な沖縄戦は、十数万人にもものぼる多数の兵士や沖縄県民の尊い人命を奪い、本県出身の多くの兵士も、愛する妻や子・父母の待つなつかしい故郷に再び還ることなく、この沖縄とその近海において一命を祖国に捧げられたこれらの戦没者に対し、慰霊のまことを捧げるため慰霊顕彰会を結成し、県民の浄財を基として昭和三十九年十一月に近江の塔を建立した。

以来二十七年、長年の風雨に堪えたこの塔を滋賀県の援助により改修し、戦争の空しさ・悲惨さを次代に正しく伝え、世界恒久平和への実現にむかってたゆまぬ努力を続けることをここに誓う。」

戦死した沖縄県民への哀悼の言葉や、戦争の空しさや悲惨さという文言を刻み、世界の恒久平和実現への努力を続けるという文言が刻まれている。

六 おわりに

①慰霊塔・碑文の調査を通して、いかにその存在や内容に無関心であったかに気づかされた。同時に、碑文の内容を読むにつけ、本土側の、沖縄への寄り添う気持ちの希薄さを強く感じた。

②碑文の内容は、アジア・太平洋戦争への理解や戦争観そのもの、沖縄戦、戦没者や慰霊のあり方について、建立に関わった多くの遺族会の方々、また各地方自治体が抱いていた考え方を手がかりともなる。と同時に、現代に生きる私たちが、これらについて考えるための重要な手がかりとなるだろう。

③碑文は石に刻まれている故に不変かと言えば、そうではない。碑文の文面に唯一の正解があるわけでもないだろう。その時代時代の人々が、納得できる内容に書き換えていくことができるもの。存在する碑文とその内容について吟味することは、戦争・沖縄戦・戦没者に思いを致すことにもつながるだろう。反対に、慰霊塔を放置し忘却してしまうことは、沖縄戦や戦争の記憶を風化させることになるだろう。

④碑文について考えることを通して、私たちは、戦没者たちからのどんなメッセージを受け取ろうとするのか。私たちが、歴史（過去）と向き合う姿勢が、問われている。

主要参考文献

大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊 沖縄の「慰霊の塔」』（那覇出版社、2007年）

沖縄県平和祈念財団編『沖縄の慰霊塔・碑』（沖縄県平和祈念財団 2007年）

平良修「沖縄戦跡の慰霊碑に欠けているもの」（『戦争賛美に異議あり』沖縄キリスト者連絡会、1983年）

真鍋禎男『沖縄 戦跡が語る悲惨』（沖縄文化社、2016年）

福島栄寿監修『知っていますか？ 沖縄県に建つあなたの都道府県の慰霊塔と慰霊碑を－今、その意義を考えてみませんか－』（沖縄問題を考える懇談会〈代表・吉岡康裕〉、2019年）